

# JRAT 活動報告書

■公開可 □公開不可

令和2年 1月 9日

都道府県	長崎県	報告者	事務局 淡野 義長		
団体名称/ 参加団体	長崎災害リハビリテーション推進協議会(長崎 JRAT)				
実施内容	<input type="checkbox"/> 組織化・連携	<input checked="" type="checkbox"/> 研修会	訓練等	<input type="checkbox"/> その他	
実施日	令和2年10月26日	実施場所	長崎市立諏訪小学校		
概要	<p>避難所運営について地域の皆さんとともに考える体験会を開催した。諏訪小を避難所と想定し、避難所生活には何が必要か、問題点は何か、運営はどのようにすればよいか、どれくらいの人が避難できるか、各10名ほどのグループに分かれ、実際に諏訪小の体育館や各施設を見学しながらディスカッションを中心に実施した。</p> <p>参加者:対象は磨屋連合自治会を中心とした地元自治会(主に役職者)、銀屋町自治会関係者 長崎市防災危機管理室 長崎市中央消防署 長崎市中央総合事務所 長崎市地域支援室 長崎市中央地域センター 桜馬場地域包括支援センター 長崎市社会福祉協議会</p> <p>参加者総数:61名(事前50、当日11名、サポートメンバー長崎 JRAT の13名を含む)</p> <p>企画:長崎 JRAT 諏訪小学校</p> <p>協力:長崎市防災危機管理室 長崎市中央消防署 長崎市中央総合事務所 桜馬場地域包括支援センター 長崎市社会福祉協議会</p> <p>構成:</p> <p>9:00 開始 関係者挨拶「磨屋連合自治吉原会長、諏訪小学校酒井校長」</p> <p>9:15 オリエンテーションと導入(多目的ホール)講話:「今回の目的とその背景」栗原 JRAT 代表</p> <p>9:40 ワーク1 避難所で使用する設備や備品を確認しよう(多目的ホールと地域交流センター)</p> <p>10:10 ワーク2 ここで避難生活をおくることと、この避難所の運営を皆で考えよう(体育館)</p> <p>11:10 ワークのまとめの話「災害と互いに支え合う地域づくり」栗原 JRAT 代表</p> <p>11:30 長崎市消防局と防災危機管理室の紹介とお知らせ 地域包括支援センターや社会福祉協議会より総評やお知らせ</p> <p>12:00 閉会挨拶 JRAT 栗原代表</p>				

## 研修会の様子



## 総括

グループワークでの意見は、トイレ関係やプライバシー保護に関する話が多く聞かれた。情報収集や寛ぐということにも話がおよんではいたが、実際に避難所生活の経験がないということで、より具体的にとなるとそこまでの想像はできないようであった。一方では、何らかの知識や経験がある参加者の所属する班では物品の話だけでなく、季節によつての差異や避難所運営に関する事項もより具体的な話になっていた。参加者の経験値や知識、関心度よつて話の具体性や深度には違いがでたようである。

今回の自治会関係の参加者は役員中心で年齢層が高く、長崎大水害の経験や記憶がある方が多かつたので水害に関わることが話の中心になっていた。

今回は初回の試みで、地域住民が主対象であつたのでアンケートまでは実施しなかつたが、グループワークや終了時の複数からの聞き取りでは、大変有意義な時間であつた、昨今の災害が多い中、足元を考える良いきっかけとなつた、これを機会に防災のことを町ぐるみで考えたい、などとおおむね好意的にとらえ声が聞かれた。

今後も継続して研修会を行うことは重要であろう。住民主体での研修のあり方の模索と同時に、長崎 JRAT 協力機関や主要3団体への広報と参加促進など、内部への協力や広報も充実させていく必要性を感じた。

長崎新聞記事 2019. 11.16

### 水や空

2019・11・16

「トイレの数が少ない」廊下で過ごすことになると寒そう。「場所によってカビ臭い。定期的にメンテナンスが必要」。こんな意見が次々に出された。10月に長崎市立諏訪小で開かれた避難所体験会のことだ ▲災害を想定した避難訓練は各地で行われているが、避難所までの経路を確認する程度で終わっている例も多い。しかし、災害の大規模化で避難生活が長引くケースが増え、避難所の「質」が問われてきている ▲そこで体験会は避難所運営について地域で考えておこうと、医療関係者らでつくる長崎災害リハビリテーション推進協議会が企画、自治会役員ら約60人が参加した ▲同小では体育館と、併設の地域交流センターが指定避難所となっており、和室や調理器具を備えた研修室もある。それでも参加者からはプライバシー保護の面などで懸念が相次ぎ、「ここでは2、3日しか過ごせない」との声も出ていた ▲地震や風水害に見舞われた被災地では、避難生活の負担による災害関連死の報告が絶えない。心身のストレスを軽減し、人間らしい、自分らしい生活を送れるような環境づくりが不可欠だ ▲そのためには事前に1泊してみたりすると、より具体的に避難所の課題が見えてくるかもしれない。難を逃れた先の困難も予測し、備えを万全にしておきたい。(久)